屯田　第64号

目　次

■　巻頭言　　屯田兵からの伝承文化 ……………… 後藤　良二　2

■　子思孫尊　決意新たに開村140周年を祝う

江別屯田兵村遺族会会長　田村邦雄さん ……… 4

■　北海道農法と屯田兵（下）……………………… 江口　憲人　8

（特別寄稿）杉村　賢一

■　北海道における戦前の歴代長官・県令の足跡 ….　武石　詔吾　32

■　一節抜粋 …………………………………………… 41

森山祐吾著『りんご侍と呼ばれた開拓者』

前田桂子著『北海道開拓を支えた高知人』

■　古地図の散歩道 「北海道蝗害国郡図」 ……………………… 42

隋風飛翔 越山踰水の痕跡 …………………… 梶田　博昭　44

■　道都札幌は軍隊が置かれたまち ………………… 田澤　道雄　52

■　屯田兵のデザイン考 ……………………………… 65

■　屯田兵の父 永山武四郎の生涯を辿る（上） ……… 北国　諒星　66

■　東西南北　旧永山邸改修終え一般公開ほか ………………… 78

■　事務局だより …………………………………… 79

■　編集後記・コラム「屯田兵人形は粗大ゴミ？」……………… 80

【題字揮毫】現代破体書法の創始者・松本筑峯氏（1918~2009年）

巻頭言

屯田兵からの伝承文化

北海道屯田倶楽部
会長　後藤　良二

各兵村には、事情があるところは別として、それぞれに屯田兵から引き継がれている文化があると思う。

その一つの例として、私が住んでいる新琴似にもそれと思われる文化がある。

それは、屯田兵の出身地の土地柄や拘(こだわ)りが礎となっているようにも思われる。開墾が始まった当時から兵村の方針として出身地の習慣がそのまま定着しているのでないかと考えてしまう。

☆

新琴似が屯田兵から伝承されている文化の源を探ると、次の事例が浮かんでくる。新琴似の所在地札幌市は、平成三十年四月一目現在で二千二百一の単位町内会があり、その連合町内会が九十ある。その中で連合町内会独自で新聞を発行して地域の自治活動の状況や現在の事情などの情報を伝えているのは、新琴似連合町内会のみであると北海道新聞に載っていた記憶がある。

新聞は、コミュニティにとって極めて大切な出版物で、地域の人たちがその土地の情報を共有するメリットは、そこに住む人たちにとって計り知れない。町内の人たちが地域の出来事や色々な事情を同時に知ることで町内がまとまる要因にもつながる。

それは今から五十年前、昭和四十年の七月に新琴似連合町内会が結成され、コミュニティの運営に当たって新聞の有効性を考え、その翌年の十二月二十日号が創刊号として発行された。それから、地域の人たちに毎月配布することになった。

平成三十年の九月には五百八十二号が配られた。半世紀も続いていることになる。

☆

継続は力なりと言われているが、その要因を探ることで屯田兵の偉業が現在も根付いていることに気づくのではないだろうか。

新琴似屯田兵の第一陣百六十四世帯は、明治二十年五月二十日に入植し、三日後には開墾が始まった。

開墾作業には、猫の手も借りたいくらい人手がいる。だから、子供にもそれなりの仕事をしてもらいたいと思う。ところが実際には、子供の教育が優先されて、寺小屋式の学校で男子三十五人女子六人の生徒四十一人の授業が始められた。

入植した年の十二月三日には、陸軍省が建てた六十四坪の新校舎に移り、授業は本格化した。兵村の運営に当たっては、兵村の運営費の半分を教育費に当てたという記録がある。

そのような兵村の方針は、出身地の上地柄や拘りによって実施されてきたのではないかと考えてしまう。武家社会の伝統文化にも拘っていた屯田兵の偉業が礎となって、今も自治社会に於いて有効的な手法で運営を進めていると思われるのである。

☆

各地の町内会では、情報の伝達方法を色々工夫しながら運営に努めていると思う。

しかし、回覧板を回して情報を伝達するには、情報量と速度に問題がある。また、色々な方法があるだろうが利点は文化の象徴と目される新聞が優っているのではないかと思う。兵村に限らず、各地域にも先人から引き継いでいる恩恵はいろいろあると思う。

今年で北海道と命名されてからは百五十年経った。色々な行事が開催されている。名前に拘らず先人から引き継いでいる文化に敬意をもつきっかけにしたいものである。

（新琴似屯田兵三世）